

## C O L U M N

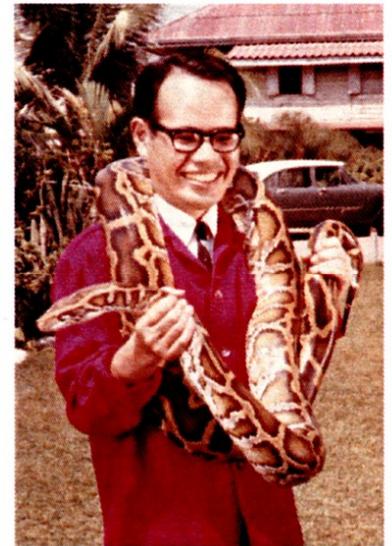
### 「蛇」との交歓

今年の干支は「蛇」である。どうして干支の中に「蛇」のような、手足がなく胴体をくねくねさせて地面を這う薄気味悪い爬虫類が十二支に加えられたのだろうか。キリスト教、イスラム教、ユダヤ教では元来「蛇」は悪魔とされている。生息する3千種もの「蛇」のうち、約25%は有毒と言われ、かなり嫌われ恐れられてもいる。だが、「蛇」は南極以外のどの大陸にも棲み、海中にも生息し、寒さには地中に竈って越冬する智恵のある、生命力の強い動物でもある。

一般的に「蛇」については、「竜頭蛇尾」「蛇の生殺し」「蛇足」のように、あまり良い意味では使われない。しかし、その一方でこれほど人間に崇拝され、信仰対象とされ、畏怖されている生物も少ないようだ。わが国では古来「蛇」は神の使いだったとされていて、しばしば古文書にも登場する。脱皮を繰り返すため「不老長寿」の象徴と看做され、ネズミなどの害獣を主食とすることから「大地母神」とも崇められている。

子どものころ疎開先の裏山で、ヤマカガシを挟みつかんで振り回し、母親や近所の女の子らに気味悪がられた。家の天井からアオダイショウがぶら下がり、母親が気持ち悪がっていたのを冷やかしたこともあった。中学生の時可愛がって飼っていたメジロの鳥籠に入り込んだアオダイショウが、メジロをひと呑みにして、腹が膨れて鳥籠から出られなくなったのを、これぞメジロの敵討ちとばかりに熱湯を浴びせて暴れまわったのをやっつけたことがある。

社会人になってからも時折「蛇」との対峙が復活し、実際に旅行会社の添乗員として東南アジアへ出かけ、見世物の「蛇」に出くわした時など、「肝試し」的に同行者の中で最初に「蛇」と触れることを求められて往生したことが再三ある。これも子どものころに「蛇」を苛めた罰当たりなのかと思いつつ、あまりいい気分ではないままに「蛇」と交歓？した。巳年の今年こそは、罰としてではなく、「蛇」が持っている「永遠」「生命力」「智恵」にあやかりたいものである。



蛇と戯れる？筆者

(近藤節夫)